



「ジャンゴタロー」考

サンコーコンサルタント(株) 東北支店長

阿部 征二

「ジャンゴタロー」、マカロニウエスタンの正義の味方の愛称ではありません。

またの呼称は盛岡弁では「ジャゴタロ」と訛り発音となります。

小生は盛岡に生まれ、高校卒業と同時に上京して37年ぶりに仙台勤務となり、久ぶりに盛岡の実家に、妻と一緒に親孝行のつもりで東京の土産を持ちご機嫌伺いした時、父の第一声が「トキョのジャゴタロ、キタガ」と笑顔で迎えてくれました。

母も「アイヤ、ヨグ、トイドゴ、オデンスタグド」「マンズハ、マンズ、ヘルムシェ」

父は明治生まれのオン年93才、母は大正元年生まれの87才とボケもせず、「アスコスガベッコバリ、ユゴド、キガネグ、ナッテガンス」と言っていますが、トスのわりにはいたって元気デアンス。おっと小生も父母とハナスッコしますと訛が出て心が洗われます。九州生まれの妻は会話の2割程の理解度で、通訳を通してのハナスッコは爆笑の連続で、笑いの涙で夜の更けるのも忘れ、親孝行しました。

ところで、先の「ジャンゴタロー」は父の心象を的確に表現していると想っております。小生の盛岡弁への想いからの私論独創的解釈をしますと、「ジャンゴ」とは在郷軍人などと表現される地方、田舎を表現する「在郷」が訛ったものではないか、父母は良く古い友人などの会話で「ドゴサ、イッテ、キアンシタ?」「モドミヤノ、ゼイノホサ、

イッテキアンシタ」の「ゼイ」は「在=田舎」のことではないか。「タロー」は「太郎」で「在郷太郎」の意味ではないか。これを盛岡訛で読むと「ジャンゴタロー」との私見であります。なんとも聞こえがよろしいではないですか。方言語学的な語源を知りたいモノです。

父の「トキョのジェゴタロ」はもっと意味深い心象を表現しているのです。

小生が東京へ出発するときの父の別れ別れ際に「オメハ、トキョサケデヤッタヨナモンダ、カラダサキツケデ、ケッパレ」と寂しげに顔を合わせず、じっと足下をみてゴモゴモと呻き声のように呟いた言葉は37年過ぎたいまでも鮮明に残っております。

岩手県の出たことない、父母にとっての当時の東京は、若者のあこがれの都会で、盛岡へ戻ってくることのない遠いところと認識していたのではないのでしょうか。今ではその東京への地理的な時間距離は、新幹線で3時間弱ですが、会話をしておりすと、父母のそれは昔の遠い時間距離なのです。

「トキョのジェゴタロ」は父母の生まれた地、南部人としての中央への気概を表していると想っています。父母にとっては東京に住んでいるヒトたちは「東京の田舎モノ」なのです。

話はそれますが、先日の長谷弘太郎氏(㈱テクノ長谷社長)が叙勲の祝賀のご挨拶の中で、社会

に出るとき、お母様に「薩長の握る政府の役人だけはなってはいけません」と言われて地質屋になられたとの、お話を伺い本当に愉快になりました。

また、「建設月報とうほく」（東北地方建設局監修の機関誌）に連載されていました、小野昌和氏（河北新報社制作局長）の特別寄稿「戊辰の風雪」、副題・東北が生んだ人たちの序章は、南部藩主だった、南部家四十二代当主、南部利祥中尉の日露戦争で命を散らした。旧南部藩士は殿様の戦死に「これで賊軍の汚名をそそぐことができた。」と涙を流した。との書き出してはじまっています。

このような東北の先達の気概は、生粋の南部人である父母から、盛岡で生を受けた小生の血にも多少なりとも流れていることを誇りに想っております。

今までの親不幸を反省して、せっせと仙台から盛岡に通いさいごの親孝行をしたいと思っております。長寿オヤンズばんざい！オフグロばんざい！

※カタカナの部分はゆっくり濁音的訛発音でお読みいただければ、東北人であればご理解いただけるものと確信しております。

